

清末小説から 104

2012.1.1

- 商務版「説部叢書」研究の昔と今 2 樽本照雄 1
《社會小説 人壽保險》の原作 渡辺浩司 9
容懿美譯《人靈戰紀土話》考略 姚 達兌 15
傅兰雅“时新小説”征文获奖作品序文鈔(下) 刘 德隆 22
清末小説から 9、15、25

本年もよろしくおねがいいたします。『清末小説』第34号を発行しました。9頁をご覧ください。目次を掲げました。本研究会ウェブサイトでも一部を除いて本文を公開しています。罫

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

商務版「説部叢書」研究の昔と今 2
不思議な版本

樽 本 照 雄

中国での研究

中国では「説部叢書」を取り上げるにしても、簡単な紹介にとどまっていた*9。

謝菊曾(1980)は、自分が商務印書館に勤務していたとき見聞したことを書いている。雑誌に連載した欧米の長編翻訳小説を単行本にして「説部叢書」に収録

したことをいうくらい。新しい事実を述べたわけではない。謝菊曾の文章は回顧談であって研究ではない。中村論文ほどの詳細さを期待するほうが無理というものだ。謝は内部事情を身近に知っていそうな人だ。しかし、「説部叢書」についてそれ以上の興味をもってはいなかったのだろう。

陸昕(2001)が書いた文章は、それにくらべれば詳しい*10。

陸昕は自分の所蔵する「説部叢書」が多数あることを披露している。昔は多くの人々が好んで読んだ叢書だった。消耗品扱いされたようだ。今となっては実物入手することは難しい。だから陸昕の蔵書は珍しいといえる。

掲げられた表紙写真を見れば、のちの初集、第3集、第4集だ。「この本の初集100種は、光緒末年に成立した」「民

国 2、3年のとき重印された」(107頁)。この説明を見ると、最初から初集で刊行されたと考えているらしい。先立つ元版があることを知らないのか、と思う。のちの第4集は22編だが、それを誤って40編と書く。

陸昕の説明は表面をなでるだけ。以前から中村論文を読んでいるものにとっては、陸論文は浅すぎて、もの足りない。実物を多数所蔵することと研究は必ずしも結びつかないのだ。

最近中国でようやく「説部叢書」の系統について説明する文章が発表された。付建舟(2009)の論文だ*11。

付が指摘する大きな事柄は、ふたつある。

ひとつは、「説部叢書」には2系統が存在すること。私のいう元版と初集本をおぎなって示す。彼は、「十集系列」(元版)と「四集系列」(初集本)に書き分けて区別する(307頁)。ようやく中村論文の水準に近づいた。

もうひとつは、作品の差し替えがあることだ。こちらも同様。

付論文の結論部分から引用する。「商務印書館の「説部叢書」にはふたつの系統がある。「十集系列」と「四集系列」だ。前者は全部で十集、毎集10種で全100種。後者は四集にわかれ、前の三集はそれぞれ100種で、第四集は22種、合計して少なくとも322種だ」(309頁)

別掲表1「変遷一覧」に付建舟の論点を参考までに示しておいた。

付論文で欠けているのは、以下のとおり。

『魯濱孫飄流続記』の集編番号変更に関及しない。付は、商務印書館の広告を資料として利用する。資料そのものが少ないから、それでかまわない。ただ、その広告自体が、事実を反映していないことに気づいていない。作品の実物を見ればわかったはずだが。見逃した理由は知らない。また、書名変更にも触れない。元版(十集系列)から初集本(四集系列)への転換がいつ行なわれたのか説明しない。それ以外は、中村が提示した基本的観点と同じだといっていいたいだろう。

付論文を読むにつけ、私はあらためて中村論文の先進性に感心する。表紙の違いについて図表を掲げて詳しく紹介したのが中村だった。付建舟よりもはるか以前に書かれている。しかし、中村論文の到達地点は、今も付論文より先にある。

謎の版本

付建舟は、つづいて「説部叢書」などをおさめた版本資料集を刊行した。

付建舟、朱秀梅著『清末民初小説版本経眼録』(上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2010.6。以下、『経眼録』)*12である。

各作品の表紙と奥付の写真を多数掲げて説明文を添える。実物を手に取って確認しました、という意味である。書名に「経眼録」と命名している理由だ。

掲載された多数の写真から「説部叢書」を抜き出して数えてみた。説明文でのみ触れられた版本は除外している。わかったのは、付らが写真で掲げた元版(十集系列)は3葉のみ。初版本(四集系列)が比較的多く56葉である。

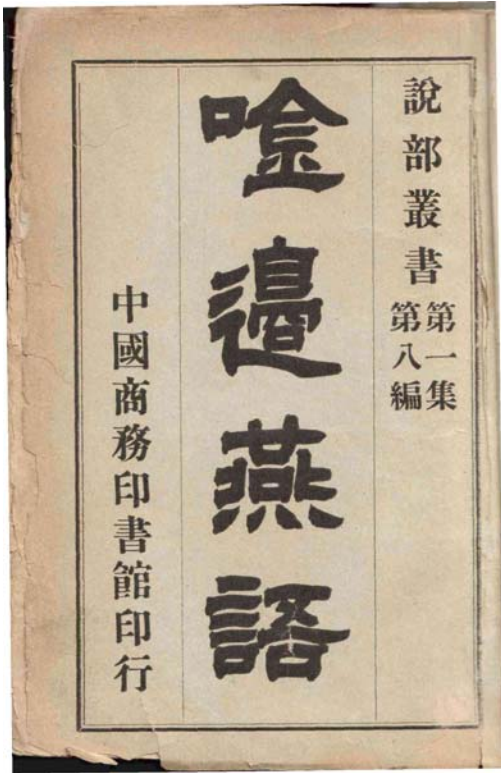


図2 吟邊燕語表紙

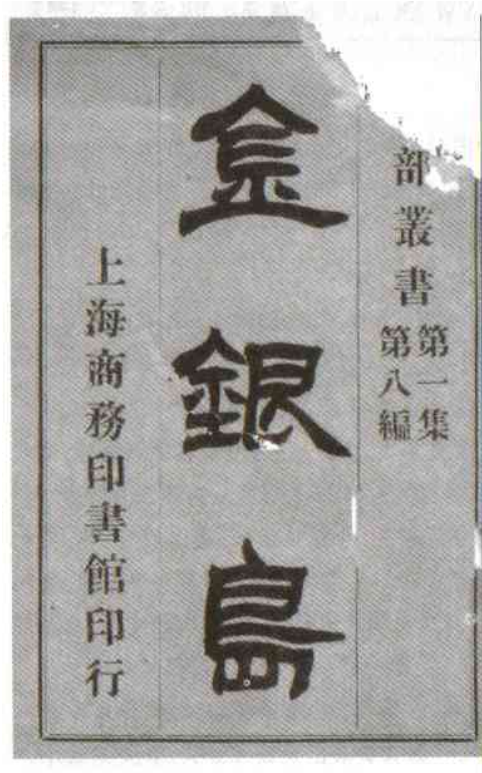


図12 金銀島表紙。『経眼録』30頁

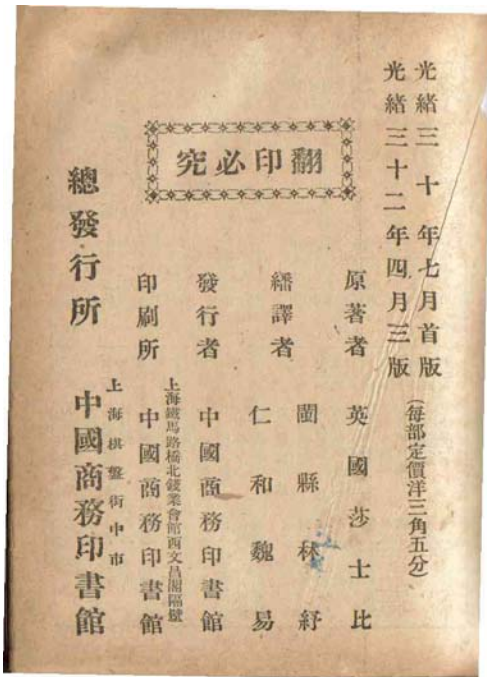


図11 吟邊燕語奥付

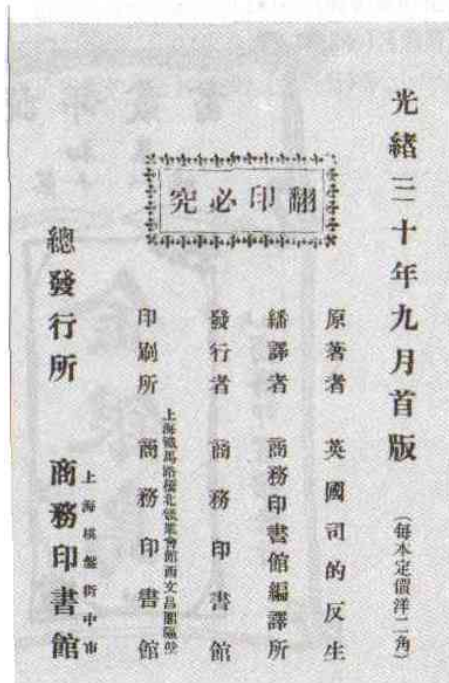


図13 金銀島奥付。同31頁

付建舟は、元版(十集系列)について細かく分類していない。私の見方でいえば、その3葉を分けて、元版1型が1葉、元版2型が2葉となる。そのうち後者の2葉は『寒桃記』上下だ。これを1種類だと考えれば、実質は、元版1型と2型でそれぞれ1種類となる。

該書に収録された元版1型の1本『金銀島』が問題だ。表紙を写真で見なければ、最初に述べたように誤植ではないかと疑っただろう。

とりあえず見てほしい。ならべたほうが理解しやすい。『金銀島』は『経眼録』(30頁)から引用する。『吟辺燕語』は架蔵のものを再び掲げる。2件ともに表紙と奥付である。

それぞれの書誌も書いておく。

金銀島 (冒険小説)
(英)司的反生著 商務印書館編訳
所翻訳
上海商務印書館 光緒三十年九月
首版 説部叢書第一集第八編(下線
樽本)
ROBERT LOUIS STEVENSON
“TREASURE ISLANDS”1883

吟辺燕語 (英国詩人)
(英)莎士比著 林紓、魏易同訳
中国商務印書館 光緒三十年七月首
版 / 光緒三十二年四月三版 説部叢
書第一集第八編*13
CHARLES LAMB, MARY LAMB“TALES
FROM SHAKESPEARE”1807

奇妙だ。両者ともに「説部叢書第一集第八編」と表紙右側に印刷している。なぜ同じ集編番号なのだろうか。

『吟辺燕語』は1906年の三版である。初版は「光緒三十年」とあるから1904年だ。『金銀島』は初版本で同じ1904年に発行されている。表示のとおり『吟辺燕語』が「七月」出版であれば、『金銀島』が「九月」だから『吟辺燕語』の方が早く刊行された。そう考えて不都合はなにもない。発行元が上海商務印書館と中国商務印書館だ。その違いはある。後者は、「説部叢書」元版に使用される例が多い。

『吟辺燕語』の集編番号は、従来から「説部叢書第一集第八編」だ。これが動

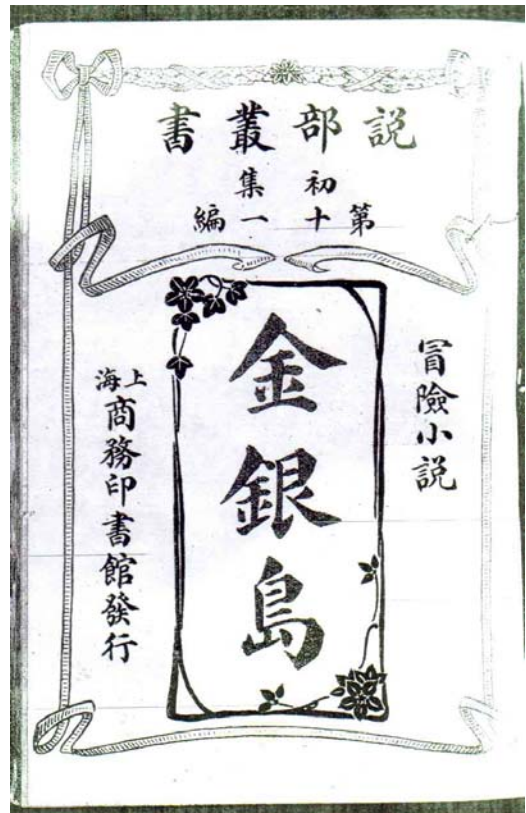


図14 金銀島初版本

いたことはない。初集本は、自動的に初集第8編(図6)となる。

『金銀島』は、もともと「説部叢書第二集第一編」なのだ。目録類にもそう記されている。初集本では、初集第11編(図14)になる。なるもなにも、実際にそうだ。こちらも『経眼録』から引用して表紙を別に示しておく。

表紙をもう一度見る。『吟辺燕語』と『金銀島』の両本が同じ集編番号であるのが不可思議だ。元版だから差し替えがあったわけではない。差し替えが問題になるのは、リボン文様の初集本だ。それぞれが異なる作品で集編番号が重複している例を見たことがない。重複させては集編番号の意味がないではないか。

付らは、この不思議な事実について何も説明しない。『吟辺燕語』とかぶさっていることを見落としたのだろうか。

『経眼録』は、元版(30頁)と初集本(32頁)の両者を掲載している。しかし、集編番号に矛盾があることに言及しない。元版が第一集第八編であれば初集は自動的に第8編になる。だが、掲げられる『金銀島』初集の表紙写真は第11編だ。番号は、明らかに異なる。付らは記述しないから、結局のところどう考えているのかよくわからない。

この奇妙な事実は、何だろうか。版元商務印書館がおかしたちょっとした誤りなのだろうか。厳密な編集方針がなかったとはいえ、集編番号までいいかげんだったとは思えない。この版本だけに見ることのできる謎の現象なのだ。

不思議といえば、謎の版本がもう1例



図15 実藤文庫



図16 『経眼録』65頁

ある。

中村は、集編番号部分を で塗りつぶしたバージョンが存在することを紹介した。『寒桃記』だ(図15)。「光緒三十二年二月首版」とあるから、1906年初版とわかる。集編番号をなぜ塗りつぶす必要があったのか。こちら元版2型タンポポ文様だから作品の差し替えが影響したわけではない。理由が不明だ。いまもわからない。

『経眼録』にはそれと同じ書籍、しかし集編番号を印刷したものをのせている。同じく元版2型タンポポ文様だ(図16)。こちらの奥付には「光緒三十二年歳次丙午二月初版 / 光緒三十三年歳次丁未仲春月三版」とある。

こちらも、ならべておこう。初版は集編番号を塗りつぶし、三版ではなぜか明記する。不思議な版本だといわざるをえない。

『金銀島』は元版1型だ。『寒桃記』は元版2型タンポポ文様である。いずれも「説部叢書」の初期刊行物に属する。わずかに2件とはいえ、実際に市場に出まわった。商務印書館がそういう奇妙な刊行物を流通させた原因はなんだろう。外から見ただけだから、その理由はわからない。

編集上の不手際による単純な誤りだでしょう。市場に出す前に点検をしなかったのかと疑う。商務印書館編訳所内部での意志疎通がうまく機能していなかった、あるいは商務印書館の製品管理が甘かったということになる。私は、ただ表紙の写真を見るだけだ。 罫

前稿注8についての補足説明

商務印書館「説部叢書」はいつ改組したのか。その時期について、もう少し考える。

改組のあらましは、次のとおり(しつこいところはお許してください)。

「説部叢書」元版十集百編は、1908年に完成した。1908年が重要なひとつの区切だ。その後、一部の作品を別のものに差し替え、あるいは書名を変更し、さらに作品の順序を変更して表紙を一新した。この手直しを経たものを初集(全100編)という。

いま問題にしているのは、初集に改めた時期である。

「説部叢書」初集をまとめて重印したのは、1914年4月で間違いはない。奥付の発行年月がそれを証明している。一般に知られているのは、この表紙がリボン文様の初集本だ。ゆえに、1914年4月が改組改称の時期だ、と考える人がいるかもしれない。だが、私は、改編が実行されたのはそれ以前だと推測している。

「1914年4月再版」と明記されるのは、やはり「再版」だからだ。

では、いつなのか。前稿では、改編の時期は1913年だとした。

作品の移動は、『魯濱孫飄流続記』のほかにも存在する。以下に追加して示す。左の元版から右の初集に新しく配置しなおされている。

上の4作品を移動させた理由はわからない。移動した事実だけが残る。

私が注目するのは、4作品が示す1913年再版(二版)という時期である。「再

表2: 「説部叢書」の改組(追加)

	元版	初集	
	第十集		
橘英男1907	第2編	第92編	冰天漁楽記1913.12二版 (1914.4再版あり)
冰天漁楽記1908	第3編	第93編	三人影1913.10再版 (1914.4再版あり)
鉄血痕1908	第4編	第94編	橘英男1913.12再版 (1914.4再版あり)
三人影1908	第5編	第95編	鉄血痕1913.12二版 (1914.4再版あり)

版(二版)」というは、元版発行が1907年、あるいは1908年であるのに対して重版になるからだ。順序に移動のある4作品は、すでにリボン文様の表紙を持つ初集である。それが1913年に刊行された。ここでも、初集への転換が1913年であったことを示している。

商務印書館の自社出版広告では、どのように表記しているのか。つまり、広告には作品移動の事実が忠実に反映されているのだろうか。もう一度、見ておこう。

私は、「『東方雑誌』第8巻第1号(1911.3.25)掲載の広告」を例にあげた。時期からいえば、元版の時代だ。初集に移行する前の広告になる。

奇妙なことに、この広告には「改組後の作品が見える」。冒頭に一部作品の差し替えがある。書名を改める。また、『魯濱孫飄流続記』を前部分に移動させている。予告にしても時期的に見て早すぎるのではないかと書いておいた。

同じ広告において、上記の4作品はどうなっているか。第92編から第95編だ。その配置場所をいえば最終部分となる。見れば該広告では、作品を移動させていない。

実際の作品全体をながめる。初集に変化があるのは事実だ。くりかえすと、叢

書冒頭で作品を入れ替え、書名を改題し、前半部で作品を移動させる。また、最終部分においても複数の作品を動かしている。

以上の事実を把握したうえで、1911年の商務印書館自社広告をもういちど見る。1913年に実施されるであろう変化について、冒頭と前半の変更は反映している。だが、最後部分の移動は表記していない。

当時の商務印書館編訳所において、「説部叢書」にどのような編集方針が定められていたのか。それは明らかになってはいない。説明した人は、ひとりもないのだ。実物の奥付を見て、広告を参照しながらの推測にならざるをえない理由である。

まとめる。同じ広告のなかで、一部は変化の予告となり、一部は従来通りの作品配列にしている。

つぎのようにいっていいのではないか。1911年当時の編訳所において、「説部叢書」冒頭の変更は予定されていた。しかし、最後部分の作品配列までは考慮していなかった。

商務印書館編訳所は、「説部叢書」について明確な編集計画をもたなかった。別のことばでいえば、流動的に対処していたことがわかる。

【注】

- 9) 謝菊曾「《説部叢書》和《林訖小説》」
「涵芬樓往事」『隨筆』第6集1980.2
- 10) 陸昕「説《説部叢書》」『蔵書家』
第3輯2001.6。陸昕「從《説部叢書》
談搜書所見」『閑話蔵書』北京・学
苑出版社2005.8北京第3次印刷 所蔵
鑑賞書系
- また、関連する別の文章、たとえ
ば郭延礼、鄒振環ほかについては、
樽本「商務印書館版「説部叢書」の
成立」をご覧いただきたい。最近のも
のでは、黄惇「也説《説部叢書》」
『蠹痕散輯』(上海世紀出版股份有限公
司遠東出版社2008.2)もある。
- 11) 付建舟「談談《説部叢書》」『明清
小説研究』2009年第3期(総第93期)
2009発行月日不記
- 12) 次の文章を書いた。樽本「小説目録
はたのしい」『清末民初小説版本
経眼録』紹介『清末小説から』第
100号2011.1.1
- 13) 本稿注1に関連する。「説部叢書」
が元版から初集本へ再編したのは事
実だ。そのことを知らない、あるい
はその区別ができない原因のひと
つは、版元である商務印書館にいく
らかの責任があるといってもいいだ
ろう。版元自体が峻別する意識を現
在でも持たない。その結果、長期間
にわたって元版と初集本の違いがあ
いまいな状況がつづいた。区別して
いるようで誤った、やや意外な例を
あげる。賈植芳、俞元桂主編『中国
現代文学総書目』(福州・福建教育出

版社1993.12)がある。「附録二 1882-
1916年間翻訳文学書目」を収録し、
翻訳文学を集めて力をいれているこ
とがわかる。発行年月の記載、版数、
叢書名および集編番号を採取する。
短篇小説集には細目を示す。先行目
録(たとえば北京図書館編『民国時期総
書目(1911-1949)』外国文学 北京・書
目文献出版社1987.4)をふまえた詳細
な記述がある。行き届いて有用だか
ら、信頼できる書目のひとつだ。私
は、今でもそう思っている。ところ
が、おかしな箇所がある。この『中
国現代文学総書目』に見る林訖『吟
辺燕語』について、いくつかの説明
が実物とは異なる。著者を記して
「莎士比亞原著、蘭姆姉弟改編」と
する。実はそうではない。該書の原
著者シェイクスピアの表記は「莎士
比」だし、もともとラム姉弟の表示
はない。ラム姉弟の名前がないから
こそ、林訖は戯曲を小説に書き換え
て翻訳した、と劉半儂によって濡れ
衣をきせられたのだ。『中国現代文
学総書目』は、あとからの知識を盛り
込んだ。つまり、実物からはなれて
しまった。しかも、「上海商務
印書館1904年7月初版。收入説部叢書
初集第8編」と明記する。「1904年7
月」の「1904年」は新暦で「7月」は
旧暦だ。中国において昔から普通に
広く見ることのできる新暦旧暦混用
である。それは別にして、問題は
「説部叢書初集第8編」の箇所だ。こ
こは、元版の「説部叢書第一集第八

編」とするのがよろしい。該目録の
同じ場所に初集本の書影(本稿の図
6)を掲げて「本書即《莎士比亞戲
劇故事集》初訳本」と注記する。ま
ぎらわしい。書影を示すとすれば、
のちの初集本ではなく元版(本稿の図
2)にすべきだった。この部分を見
る限り、編者は説部叢書第一集(元
版)と初集本の区別がついていない
といわざるをえない。同様の箇所は
多くはない。だから意外に思う。

『清末小説』第34号

2011.12.1

翻訳家奚若	樽本照雄
Sam Briggs の中国語訳	渡辺浩司
曾孟樸の初期翻訳(下)	樽本照雄
書家としての呉禱・補遺2	沢本香子
天涯处处有芳草 錢塘海陽是兩家	郭 長海
从《鉄雲詩存》看劉鶚人生“三游”及詩歌 “太谷化”	伏 涛
貴重な出版史料のひとつ.....	樽本照雄
『繡像小説』主編を示す商務印書 館の新聞広告	
李伯元遺稿(13・完) 李錫奇『南亭回憶 録』より	

清末小説研究会

<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

《社會小説 人壽保險》の原作

渡 辺 浩 司

1

《中華小説界》第三卷第三期(中華書
局,1916年3月1日)に、《社會小説 人壽保
險》なる短篇作品が掲載された。本誌前
号の拙稿「《醫學小説 鑽崇》の原作」で
採り上げた《鑽崇》と同様に、書名下に
は“農生”とあるだけで、創作に見える。
『清末民初小説目録 第4版』(樽本照雄
編,2011年3月31日)も創作としている(R0069)。
しかし、実は本作も《鑽崇》と同様に翻
訳なのである。残念ながら、本作も原作
は不明である。だが、日本語訳があり、
それとの一致から翻訳と判断できる。

その日本語訳は、涙香小史(黒岩涙香)
訳『生命保險』である。同作は、やはり
前稿で採り上げた『金剛石の指環』と同
じく、1889~1890年に『都新聞』に掲載
され、後に『涙香集』(扶桑堂,1890年9月
24?日)に収められた*1。本稿でも、国立
国会図書館の近代デジタルライブラリー
で公開されている『涙香集』を使用する。

前稿を繰り返すが、黒岩涙香は、本
名・黒岩周六、出身は現在の高知県、

1862年生、1920年没、新聞記者から、後には新聞を主宰するまでになった。その新聞に連載した海外小説の翻訳でも評判だった。

農生は、前稿同様に未詳である。

2

日本語訳『生命保険』に拠り、あらすじを述べる。

第一回

主人公・枯田夏子は12歳で母を失い、17歳の時、父が再婚し、父、継母と暮らしていた。そのうち、夏子と継母との関係が悪くなり、夏子は家を出、住み込みの家庭教師として働く。3年後、父のことを心配していたある日、夏子は継母から父が急逝したとの手紙を受け取る。内容は、4月4日の夕食時に倒れ、5日午前1時に亡くなった；悲しみのため、この手紙を出すのが遅れた；夏子に早く外郎村へ来るように等であった。夏子は休みをとり、汽車で外郎村へ行った。継母に再会し、父の亡骸に会いたいと言うと、すでに納棺したと言われた。

第二回

夕食後、夏子は継母から経過を聞いた：体調不良だった父が保養のため、ここを借りた；ここの2階は物置で使えず、1階に夫婦と下女で暮らしていた；父は金策のため、4、5日前に家を出、御機嫌で4日夕方に帰って来た；夕食時、シャンパンを3杯飲んだ所で突然倒れた；医者を呼ぶも深夜1時に亡くなった等々。

その夜2時頃、2階から物音がし、夏子は目を覚ます。泥棒かと思い、約20分耳

を澄ませていたが、人の足音だけだった。継母に尋ねようと思ったが、葬儀で忙しく、夏子はそのことを忘れてしまった。式が終わり、継母は夏子に遺産のことを話した；生命保険の一万ポンドがあり、父の遺言でその中から夏子に一千ポンド分けられるとのことだった。

第三回

夏子は遠慮したが、結局、受け取ることになり、そして継母が今後はロンドンの兄の所へ行くと聞いた。その夜、また2階から足音が聞こえたので、夏子はランプを点けたまま眠った。数時間後、夏子が目を覚ました時、部屋を覗く者に気付いた。なんと父の顔だった。夏子は起き上がり確かめようとするも、誰もいなかった。

翌朝、夏子が帰る準備をし、継母に夜のことを話すと、継母も、夜に父の顔を見て起きたが誰もいなかったと言った。夏子は医者を訪ね、このことを話すも、父を思う気持ちのせいだと言われた。夏子は継母と別れた。

第四回

その後、夏子は一千ポンドを受け取り、家の主人に預けた。4か月後、その家が新たに子供に絵を習わせることになり、青年画家の堀川碧水を呼ぶことになった。夏子が堀川と話した時、堀川が夏子の姓に言及し、枯田健造を探していると話した。夏子は父であることを言い、すでに亡くなったと伝えた。

第五回

夏子が理由を聞くと、堀川は、伯父の堀川堀江が5か月前から行方不明で、不

明になる直前に枯田健造と会っていたことがわかり、それ故探していると答えた。更に、堀川は、伯父が古書好きでヨークの古書市に出かけた；帰って来ないので、問い合わせると、古書市終了の翌日、ロンドンへの汽車に乗ったと言われた；新聞に広告を出すと、最近、同乗者から連絡があり、途中駅で偶然に健造と会い、下車したとのことだった。夏子が日付を聞くと、4月4日と言われた。夏子がそれは父の命日だと告げ、不思議なので継母に手紙で尋ねた。

第六回

継母からの返信に、4日夕方、父は堀川堀江を連れて帰宅；父は夕食時に倒れ、そのまま急逝；堀川は父の死を見て、午後10時の汽車でロンドンへ帰った；その際、堀川の住所を聞いていなかったの、それきりになった等とあった。手紙を見た堀川は外郎村へ行った。翌日、夏子は堀川から父の写真を借りたいとの手紙を受け、写真を送った。翌夕、堀川は戻り、夏子に村での調査を話した。

第七回

堀川はまず伯父と夏子の父の写真を見せ、二人が全く違うことを示した。そして、村で池田医師を訪ねると、池田は堀川堀江の写真を見て、枯田健造だと言い、枯田健造の写真を見て、堀川堀江だと言った等と話した。堀川は夏子に、なぜ二人が名前を取り換えたのか、心当たりはあるかと尋ねた。

第八回

その後、夏子は2階の足音のことを思い出し、継母に聞こうと思い、翌日、ロ

ンドンへ出かけた。下女から、継母は3日前から出かけていると言われ、病床にある継母の兄へ取りつがれる。なんと病床にいたのは父で、別人のようにやせ衰えていた。父は、継母がお金を持って逃げたことや夏子に手紙で連絡しようとしていたこと等を話した。

第九回

夕食後、夏子がこれまでの経過を話すと、父は詳しく事情を語った：借金取りから逃げるために外郎村へ移った；3月末、仕事を求めてある地方へ行き、帰途の4月4日、偶然に堀川堀江と会い、家へ誘った；食事中、堀川が突然倒れ、池田医師を呼んだが、助からなかった；池田が継母に倒れたのは夫かと尋ねた時、継母はいと答え、自分を指して堀川堀江だと言った；池田が一旦帰った時、継母に一万ポンドの生命保険のためだと言い含められた；2階に隠れたが、夏子が来た時、会いたくて、動いたり部屋を覗いたりした；継母の兄と名乗り、保険金は受け取ったが、病気になる、そして継母が逃げてしまった等々。

夏子は看病したが、3日後に父は死亡した。葬儀を終え、夏子が住み込み先へ戻ると、遺産の一千が投資で三万になったと主人に言われ、退職することになった。

数日後、夏子は堀川にこの件を話し、保険会社にも伝えた。堀川堀江も同じ会社で一万ポンドの生命保険を掛けていたので、5か月分の保険料を清算しただけで済んだ。後に、夏子と堀川は結婚した。

継母は、3年後、ある紳士と結婚した

が、間もなくその紳士を毒殺したとして逮捕された。裁判が始まる前に病死した。堀川堀江が突然に死亡したのも継母が毒を盛ったに違いないと人々は噂した。

日本語訳(以下、日訳と略称)は、人名をすべて日本風に行っている。夏子の父、健造も継母による毒殺だと思われるのだが、言及は無い。

3

中国語訳(以下、中訳と略称)について述べる。日訳との相違は、《鑽崇》と同様、本作にも見える。主な相違点を挙げる。

1.日訳は9回に分かれているが、中訳は分かれていない。これは、『金剛石の指環』と同じく日訳が連載の都合から分けたもので、原作は中訳と同じく分かれていないと思う。

2.冒頭で、日訳は継母と夫の連れ子との関係の悪さを説明する；中訳はそれは無く、父から娘への台詞で始まる。

3.父が倒れた時の飲料が、日訳はシャンパン、中訳は白蘭地(ブランデー)。

4.保険金の一部を娘に分ける遺言について、日訳はそれをいつまとめたかは書かれていない；中訳はそれを死ぬ間際に言ったことにしている。

5.葬儀の日の夜、娘が父の顔を見た時、日訳は部屋の入口の垂れ幕から見えたとする；中訳は部屋の窓ガラスの外に人がおり、カーテンの間から見えたとする。この時は、部屋のランプを小さく点けており、ガラスだと反射して外は見えない

と思うので(外の方がより強力なランプを持っていたとは書かれていない)、中訳はおかしな感じがする。

6.父の顔を見た翌日、娘が継母に話すと、日訳は継母も見たと言う；中訳は無い。

7.送られた一千ポンドを、日訳では主人(男)に預け、主人の台詞が入る；中訳では主人の妻の斯羅夫人に渡す。なお、日訳には娘が住み込みで働く家の主人夫婦の名は出てこない。

8.日訳は、画家が娘に娘の父のことを尋ね、行方不明の伯父の話をした翌日に、娘が継母にそのことを尋ねる手紙を書くことになっている；中訳は、それらが同日のことになっている。

9.外郎村で画家が医者を訪ねた時、日訳は捜しているのが自分の伯父であることを告げる；中訳は告げない。

10.娘が生きていた父と再会し、会話する場面の最初の方で、日訳は、父が亡くなった画家の伯父に同情し、画家には言及しない；中訳は、同情は無く、調べを進めた画家を褒める。

また、同場面の最後の方で、中訳は、父が葬儀に来た娘に会って、事情を話そうと思ったが、継母に固く止められたことを話す；日訳には無い。

更に、同場面の最後で、日訳は継母への恨みを述べ、娘に詫げる；中訳は、恨み言の後、自分が回復すれば継母を見つけ出してけりをつけてやると話し、詫びは無い。

11.娘の一千ポンドが三万ポンドに増えた理由として、日訳はある事業に投資し

たためとする；中訳は鉞山株に投資し、値上がりしたためと具体的になっている。なお、日訳は貨幣単位が突然「圓」になっている。

12. 三万ポンドを受け取った後の娘は、日訳では、数日後に画家に真相を話し、家の主人夫婦には話していない；中訳では、すぐに画家を呼んで、主人夫婦の前で真相を話している。

作品の長さ(『生命保険』28頁分、《人壽保險》16頁分、『金剛石の指環』13頁分、《鑽崇》7頁分)から見て、《鑽崇》ほど頻繁に相違点が見られるわけではない。ただ、これは中訳の後半に省略が多く見られるためかも知れない。

原作未見なので、中訳が省略無しに原作どおりに訳し、日訳の方が加筆しているとも考えられる。しかし、中華小説界誌に見える農生が関わった作品は《人壽保險》、《鑽崇》のみであり、共に、中訳発表以前に日訳が1冊の『淚香集』に収められている；また、本作の地名で、日訳「外郎村」が中訳でもそのまま“外郎村”となっている；更に、画家が絵画を学んでいた所を、日訳では「羅馬府」とし、中訳も同じく“羅馬府”とわざわざ同じ「府」を付けたままにしている。これらの根拠から、中訳は日訳からの転訳だと推測した。

日訳では、娘と継母との仲の悪さを強調しようとする表現が所々に見られる。中訳はそうではない。それが端的に示される両訳の冒頭部分を挙げておく。

母と云ひ子と云ふ、世に是ほどの親しき者はなし。去れど唯一字の違ひにて繼母と云ひ繼子と云ふ、是ほど親しからぬ者はあらず。繼母の言葉は柔しくても針持つ様に聞え、繼子の返事は神妙でも曲りて聞ゆ。去れば現在親子と名乗りながら唯だ「繼」の字に隔てられ遠く奉公に出る娘もあり。茲に書出す枯田夏子嬢も亦繼の字に隔てられ、家を離れて他人の中に住み憂世のままならぬを嘆き暮す一人なり。嬢は十二の年に母を失ひ、父一人を父ともし母とも思ひて仕ふるうち、嬢が十七の年父は二度目の妻を迎へ「嬢や今日からは此阿母を亡なつた阿母と思つて神妙にするのだよと言渡せしかば、嬢は後生大事に其言葉を守り、若し我儘して叱られてはと何事も母に相談し、母も初の中は信切に差圖せしかど、後には「工工夏蠅いよ」と一言に斥けらる。是が嵩じて終には一つ家に暮す事もなり難く、父に願ひて家を出で今は女教師と成て或大家に雇入れられ……(79-80頁)*²

有一天卡克對他女兒茜紗道：“兒呀。你生身之母。早已亡故。如今事奉後母。須誠心誠意。當作親生母親一般。才能相安無事。就是你後母。比你亡故的母親。雖稍微兩樣點。你也得忍耐些兒。我最親愛的女兒啊。可憐你白髮垂垂的父親……”卡克說到此處。喉嚨裏早已哽住。說不下去。茜紗

低垂著頭。緊閉著眼。硬將淚珠兒。一顆顆。往肚腸裏落下去。生恐露出一些悲哀樣子。傷他父親的心。看官。要曉得這家庭骨肉之間。一旦有了嫌隙。任是百般彌補。也是彌補不來。只看卡克父女兩人。費盡千辛萬苦。一個對付後妻。一個對付後母。終久是對付不過去。弄到末了。茜紗安身不住。只得辭別父親。去到那相隔幾百里路的鄉紳人家。……(1頁,句点是原文のまま,コロンの引用符は補った)

(ある日、カクは娘の茜紗に「娘よ、お前の実母はとうの昔に亡くなった。これから継母には誠心誠意仕えてくれ、実母と同じように。そうしてこそお互いに争うことなく暮らせるだろう。継母のことは亡くなった母と比べて少し違うけれども、お前もちょっと我慢してくれ。我が最愛の娘よ、髪も白くなりかけのお前の父を憐れに思って……」カクはここまで話すと、のどから早くも嗚咽を漏らし、続けられなくなった。茜紗はうつむいたまま、目をしっかり閉じ、涙を一粒一粒無理に飲み込んだ。悲しむ姿を見せて父を傷つけるのを大変心配したのである。読者のみなさん、家族の仲というものは、一度疑いが生じてしまうと、たとえあらゆる方法で修復しようとしてもできないものなのである。さてカクの父と娘は苦勞の上に苦勞を重ね、一人は後妻に、一人は継母に相對していた。結局、相對し切れなくなり、最後を迎えた。茜紗は身の置き場を失い、

やむを得ず父と別れ、数百キロ離れた地方の名士の家に行き、……)

中訳を読むと、二人とも苦勞しているならば、なぜ再婚したのか、なぜ離婚しないのかとってしまう。

4

約百年前の保険金詐欺(殺人かも知れない)を扱った作品を見てきた。現在でも保険金を騙し取ろうとする犯罪は時々報道されるし、そのための殺人事件も聞くことがある。この点では人間は変わっていないようである。

黒岩涙香の翻訳や創作作品は20作以上が、晩清期にもうすでに転訳・翻訳されている。ただ、それらは比較的分量の多い作品であり、短い作品については言及が無かったように思う。転訳されるまでに四半世紀もかかったものの(1890年1916年)、涙香の翻訳短篇も中国に入っていたのである。 罫

*《社會小説 人壽保險》の複写入手に、北海道大学の長井裕子先生のお世話になりました。末尾ながら記して御礼申し上げます。

【注】

- 1) 小森健太郎「解題」(『黒岩涙香探偵小説選』,論創社,2006年8月10日)に拠る(259頁)。また、『涙香集』奥付の日付は手書きのようであった。そのためか、本によって異なるようで、「解題」では、「七月」になってい

る(同頁)。

2) 原文は句読点等は無い。読みにくいので、前稿と同様、前掲『黒岩涙香探偵小説選』に収められた本作により、句読点等を付す、また、繰り返しを表す記号は使わず、文字を繰り返し返した。

【参考文献】

伊藤秀雄『明治の探偵小説』晶文社,1986年10月 双葉社版(2002年2月20日)を使用

小森健太朗「解題」-『黒岩涙香探偵小説選』(論創ミステリ叢書18),論創社,2006年8月10日

中村忠行「清末探偵小説史稿(三・完)-翻訳を中心として-」-『清末小説研究』第4号,清末小説研究会,1980年12月1日

『近代文学琴声』第8期

- 福建工程学院・林紓文化研究所2011.11.11
- 2010年世界林紓文化研究情況綜述 ...蘇建新
- 林紓与中国近代文学史李 建
- 林紓与辛亥李 建
- 林紓言情小説の愛情倫理及其文化意義張俊才
- 林紓与《東方雜誌》王 勇
- 林紓和他的《閩中新樂府》郭建鵬、郭建輝
- 閩都大講壇“人文林紓”講座走進福建工程学院林峰、胡寬正、莊玲娥
- 2011年中国近代小説国際學術研討會暨中国近代文学学会小説分会年会綜述劉青青、龍瑩瑩

容懿美譯《人靈戰紀土話》考略

姚 達 兌

提 要

《人靈戰紀土話》，容懿美(Emma Young)譯，英國約翰・班揚(或譯本仁・約翰；John Bunyan, 1628-1688)原著。是書分上下二卷線裝，每卷一冊九章，前附譯者原序，內文共為一百六十五葉，按現代書版頁碼算即三百三十頁，另有繡像十四幅，全書合計為三百四十四頁。封面印有書名“人靈戰紀土話”，出版時間“光緒十三年”、“主降世一千八百八十七年”，刻行機構“浸信會藏板”字樣。美國哈佛大學哈佛燕京圖書館、澳門中央圖書館何東分館有藏。



(Courtesy of Macau Central library)

釋名

《人靈戰紀土話》一名，襲自英國倫敦差會傳教士慕維廉（William Muirhead, 1822-1900）所譯《人靈戰紀》（上海福音會堂，光緒十年，即1884年）書名；“土話”，是指當時的“羊城土話”，即粵語。

班揚原著名為：*THE HOLY WAR, MADE BY SHADDAI UPON DIABOLUS, FOR THE REGAINING OF THE METROPOLIS OF THE WORLD; OR, THE LOSING AND TAKING AGAIN OF THE TOWN OF MANSOUL (1682)**1。原題為《聖戰》，是指全能王（SHADDAI）與魔鬼（DIABOLUS）之間的戰爭。故事是講：魔王作為全能王之奴僕，反叛全能王，用詭計佔得人靈城；全能王之太子以馬內利（耶穌之名，意為“神與我們同在”[太1:23]）奉命討伐魔王，收回人靈城。因而雙方興兵構怨，所爭之地乃為世界的首善京師——“人靈城”。作者描述人靈城如下，“呢個繁華世界，其中有一個華美嘅城，喺用奇珍異寶砌成嘅，地方極之闊大，而且萬物都齊備。喺個處做生意之人，皆得方便，真可謂普天下有第二個城，比並得一樣咯。有實憑據建立呢個城之人，係全能王。因佢建立呢個城，實欲遂自己快樂呀。但凡世界上嘅榮華，都喺呢個城顯耀出嚟嘅。個城委實係好地方。有人話，始初建成之時，有天使落嚟睇過，謳歌讚美佢。個城有權柄管轄左右界內嘅地方，萬民是必要認呢個城係自己京城，更要順服個城添呀”（P1）。此城隱喻所指即為人類的靈魂。人靈城有五個城門，“呢五度門嘅名，一曰耳門、二曰目門、三曰口門、四曰鼻門、五曰覺門”（P2）。上卷

攻城征戰，皆從此五門進出。此城喻指人的靈魂，而城門則如人身心上的耳、目、口、鼻、覺等諸種感官，其意蘊所指即為人世之種種欲念，由此而生種種罪禍。這種譬喻，仿似釋家的七竊、六根之喻。

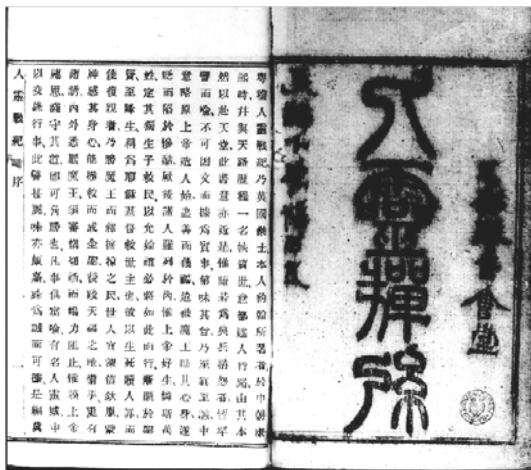
至於“戰紀”一詞，竊以為乃受王韜《普法戰紀》的影響而擇用。“慕維廉與王韜關係親密”*2。慕維廉譯本《人靈戰紀》出版於1884年。此前，他已與王韜相識近三十年。五十年代初，王氏供職於墨海書館（London Missionary Society Press），並協助慕氏和麥都思等倫敦會教士翻譯《聖經》*3。後王韜遁逃、避居香港，並參與了委定本《聖經》的翻譯。同治十二年（1873），王韜所撰《普法戰紀》於香港出版*4。《普法戰紀》為時人所重，風行海內外，一時洛陽紙貴，竟相傳抄、盜印。王氏也自稱此書可傳，其聲名身價也因此書而大增。鑒於慕、王兩人多年交善，而且《普法戰紀》聲名顯赫，影響到慕氏取《人靈戰紀》一題，也是可能的。

甚且，可更大膽地假設，慕氏譯本是王韜助譯或修定，而《人靈戰紀》一題也是王韜所取。推測助譯者有王韜，理由如下：一、時間吻合。王韜於光緒八年（1882年）四月至七月、光緒九年四月至中秋這兩段時間，在上海和蘇州休養。光緒十年（1884年）暮春三月，又歸上海，從此居於滬上。恰巧的是，慕氏本雖成書於光緒九年十二月（即1884年初），正式出版卻是光緒十年三月（封面署有“光緒十年陽春月”），正與王韜定居於上海是同一個月。王韜回上海，肯定會與老友慕維廉會面。若是王、慕兩人見面，重操舊業，一起翻譯作品，或者慕氏初譯後由王氏修改，也

是可能的。二、1884年王韜居於滬上，即任申報館主筆，而慕氏本全書最後一頁有“上海申報館代印”字樣。王氏與申報館的關係非同尋常。在此之前的十年，他在申報館發表了一系列的小說。故而，慕氏本《人靈戰紀》若非王氏助譯，也可能有申報館同仁相助。三、慕氏本是典雅文言譯成。對比王氏此時段的作品，可發現《人靈戰紀》的語言風格與王韜的文風極為相似。因而，慕氏《人靈戰紀》的翻譯，或有王韜參與其事。

容懿美在翻譯之時，應該是參照了慕維廉原譯《人靈戰紀》。一、其題名照抄自慕氏本。二、慕氏本十八章不分卷，容氏本也是十八章，但分成兩卷，內容是相近的。三、容氏在序中自稱常讀《人靈戰紀》一書，可知她必定熟知原著，而後以慕氏本為參照底本，才完成翻譯的。對照這兩個漢譯本後，可發現容氏粵語譯本比慕氏本增加了不少內容，篇幅多出兩倍有餘。

土話，特指羊城土話，即粵語。羊城土話本是口語，然則將其直接變成書寫，卻非由此始。容氏在其譯序中稱：“予因常覽是書，大益身靈，故將此書繹成中土文字羊城土話，俾讀者瞭解于口，而亦明於心，實欲其同步永生之路焉”。漢語文言更適合案頭閱讀，而日常口語本不用以著述。容氏要讓讀者“瞭解於口”，則可謂是將粵語直接變成書寫的新嘗試。實際上，作為口語的粵語，並無固定的書寫模式。近代將粵語固定書寫成書，首倡於招子庸《粵謳》（廣州西關澄天閣，1828年）*5，然而《粵謳》中的粵語，畢竟是存寄於詞曲之體中，表達並不自然、地道。較為自然的粵語書寫，要至十九世紀六十年代後才出現。兩次鴉片戰爭之間，不少傳教士已開始嘗試用土話翻譯基督教作品。到六十年代第二次鴉片戰爭結束，諸種《北京條約》（中英、中法、中俄，1860年）簽訂後，傳教士開始有意識地用官話（北京話）譯經和著述。在廖闊的帝國內部，京白雖是作為官話，但在有些地方仍是不能通行。況且，基督教傳教士需要盡可能多地吸引信眾，故而採用本地土話著述，也是必選之途徑。職是之故，六十年代後，《聖經》漢譯本遂有多種方言譯本。受方言譯經的影響，此時傳教士的翻譯著作也多用方言土話譯成。第一部傳教士小說，乃米憐（William Milne, 1785-1822）所著的《張遠二友相論》，初版於1818年，是以淺文理（即淺白文言）語言譯成。其後半個世紀，這個小說逐漸有了各個口岸方言的譯本，如1854年有廈門版，1858年有上海版，1862年有粵語版，1875年有官話俗語版*6。班揚最為著名的小說《天路歷程》，也有



（慕維廉譯《人靈戰紀》，右為封面倒影，左為前序）

類似的重譯現象。慕維廉在譯《人靈戰紀》之前的幾十年，就曾將班揚的名著 *The Pilgrim Progress* (1678) 譯為漢語，名為《行客經歷傳》(上海，1851年)，這是《天路歷程》的第一個漢譯本。此後是賓維廉 (William C. Burns, 1815-1868) 於1853年所譯的《天路歷程》。以此本為母本，衍生出許多方言土話譯本，如同年的廈門話拼音本，1865年的官話本，1870年的粵語本《續天路歷程土話》，1871年粵語本《天路歷程土話》(俾士，即George Piercy所譯)*7。《天路歷程土話》風行一時，初版旋即售罄，于1873年重印了一百部*8。容氏《人靈戰紀土話》出版於1887年，較為可能的是：容氏的《人靈戰紀土話》一書，正是受到《天路歷程土話》的影響而翻譯的。《人靈戰紀土話》受《天路歷程土話》影

響最明顯的兩個方面，還在於其所用的語言和內文的插圖，極為相近。(此處茲不贅舉，請參看插圖。)

譯者

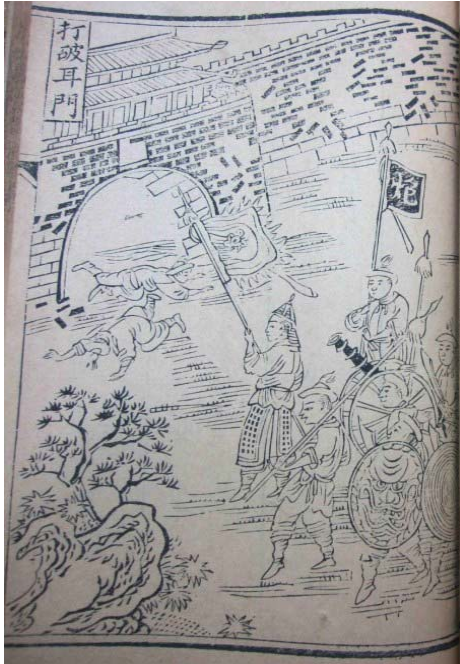
譯者是誰？通常認為是容懿美女士，即Miss Emma Young。1883年，她畢業于美國東南浸會學院(現名Southwest Baptist University)，是該校的首位海外傳教士。容氏受“美南浸信會”外使部(Foreign Mission Board of the Southern Baptist Convention)所派來華，1884年1月到達廣州。甫至廣州，容氏即開始學習漢語(估計是粵語)。她在寄回國的信件中自道其刻苦學習，每天要用六個小時學習漢語。她說，“因為這種語言需要投入大量時間才可能學會，但是我極為喜歡，並不因其太難而氣餒”*9。



左為《天路歷程》(1871)插圖。



右為《續天路歷程》(1870)插圖。



以上兩圖出於《人靈戰紀土話》(1887)。(Courtesy of Macau Central library)

容氏在學習漢語的同時，還開始組織她的女子學堂。1886年，她在美國籌得五千元。1888年用此筆款項在廣州開辦一間學校，並自任校長。1889年，容氏回美國，歸嫁(長她一級的校友) William S. Ayers。此後，容氏所創學校由浸信會傳教士紀好弼(Rosewell H. Graves, 1833-1912)之妻接管，命名“培道女學堂”^{*10}。

然而，譯者是否真是容氏？這裏有個疑點：此書封面不署譯者姓名。同一時期在廣州出版的大多數傳教士作品，在封面上都署有譯者姓名。容氏的名字僅僅出現在第一章之前的《人靈戰紀原序》篇末。所謂“原序”，即指慕維廉譯本的原序，但並不盡然。容氏只取了慕維廉原序的幾句話，其它內容盡是自己發揮而作。這是否可確認《人靈戰紀土話》的譯者為容

氏？事實上，傳教士的著作，大多數是眾人合作的產物。一本著作的完成過程，一般情況下既有傳教士的提倡或批評，也需中國本土文人的潤色或增刪。幾個傳教士和幾個中國文人共同完成一本書的翻譯或著作，是很常見的。所以傳教士文學的作者、譯者不易輕易斷定。但在未找到充分證據前，仍應將譯者歸於容懿美。

此書由浸信會出版。浸信會是嶺南勢力最大的基督教派之一，在兩廣一帶的影響巨大。浸信會士羅孝全(Issachar Jacob Roberts, 1802-1871)于道光二十六年(1846)在廣州南關創立粵東浸信教會。次年洪秀全在那裏聽到了基督教義並認識了羅氏。1871年，紀好弼在廣州石基裡設立義學。1880年，紀氏又在廣州五仙門買地購屋，以建立學校，是為中國浸信會神學

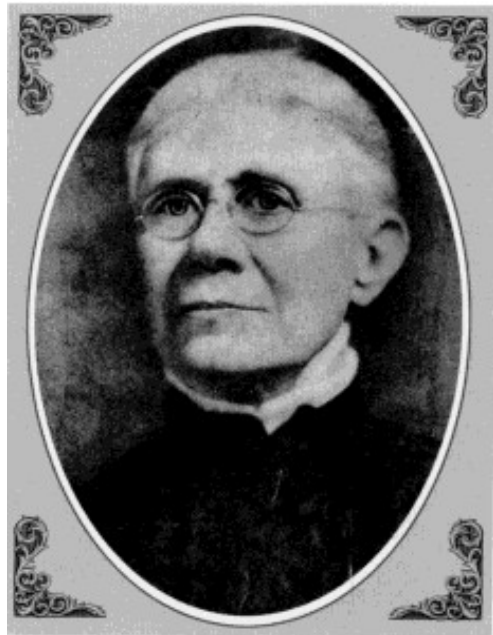
院的雛形。紀好弼與容懿美有交往。容氏曾就辦學之事，向紀氏請教。而且，容氏所創學校也是位於五仙門，有紀氏幫助的功勞。紀氏著述頗豐，漢語著作主要有：《醒世要言》、《真理問答》、《羅馬人書注釋》、《基督生平》、《救主之足跡》、《喻言之解釋》、《保羅書信淺釋》等，此外還有一些粵語著作，例如其譯粵語基督教《詩篇》和其他聖詩。這些作品曾在兩廣大為流行。容氏在中國時間過短，除了是培道女學的創辦者外，幾乎是藉藉無名。竊以為：她應是在紀氏的指導或影響之下，學習和使用粵語，才翻譯出《人靈戰紀土話》的。

㊦

附：原序

《人靈戰紀》一書，乃英國耶穌教徒所著，其姓本仁名約翰。時在中朝康熙年

間。並著《天路歷程》一書，始終皆設譬詞，其意無非述人行路，如何方能得到天堂境地。然此書之意，頗亦近是。惟語言雖若興兵構怨，亦不過罕譬而喻，第味其旨，乃至真至誠。其意原真神鑒觀下民，俱被魔誘，將來盡遭審判，要受沉淪之苦。故其好生之德，憐斯世人，特遣其獨生愛子臨世，以生死贖人罪愆，乃勝魔王而釋被擄之民，令人與己複親。故是書之著，冀讀者識得真神深恩、耶穌救主大功，當如何謹慎從善拒惡、棄假歸真，是誠《人靈戰紀》之要也。至於人名、地名，非真有其人其地，亦不過假借名目以儆醒人分別善惡耳。讀者不可因文而據為實事也。如首篇所云“世界國”者，比世上也；“人靈城”者，比人靈魂也；“交鋒打仗”者，比人心善惡相拒也。故是書



Emma Young (Courtesy of Southwest Baptist University Archives, and Sandra Brown, the archivist.)

冀閱者略悟其意，心領而神會也。今故作一小引於首，使知書之所由來，而追其本言之理。予因常覽是書，大益身靈，故將此書譯成中土文字羊城土話，俾讀者瞭解于口，而亦明於心，實欲其同步永生之路焉。

時在 光緒十三年丁亥季秋下浣，美國容懿美序

【注】

- 1) 班揚此書，除本文介紹的慕維廉譯本和容懿美粵語譯本外，據筆記所知漢語譯本還有：1.《靈界大戰》班揚（原題：本仁約翰，John Bunyan）著，上海：中西基督福音書局，208頁，32開。見北京圖書館編：《民國時期總書目 1911-1949宗教》，北京：書目文獻出版社，1994年，第152頁，編號S2279。另有《靈界大戰》官話，煙臺東山樂天園（無其他信息。引注：《中華基督教會年鑒》1916年“華四十三”頁，記錄有“東山樂天園”條。故而《靈界大戰》一書在煙臺的出版時間，應該在1916年左右）。宋莉華著：《傳教士漢文小說研究》，上海：上海古籍出版社，2010年，第290頁。2.“古樂人譯：《聖戰》（Holy War）（香港：宣道書局，1963），《聖戰》現已絕版，香港恩光出版社把同書易名為《靈界大戰》，於1995年以新版印行，印數為2,500冊。”見黎子鵬：《〈天路歷程〉漢譯版本考察》，載《外語與翻譯》，2007年第1期，第37頁注4。
- 2) 張海林：《王韜評傳》，南京：南京大學出版社，2007年，第54頁。
- 3) 李天綱著：《中國禮儀之爭 歷史、文獻和意義》，上海：上海古籍出版社，1998年，第333頁。
- 4) 王韜著：《普法戰紀》，香港：中華印務總局，同治十二年（1873）。中山大學圖書館、澳門中央圖書館何東分館有藏。
- 5) 簡體漢字整理本見：清·招子庸撰，陳寂評注：《粵謳》，廣東人民出版社，1986年。中山大學圖書館、澳門中央圖書館何東分館有藏。有關《粵謳》版本及其英譯情況，請見拙文《〈粵謳〉的英譯、接受和敘事》，將刊于《文化遺產》，2011年第3期。
- 6) Daniel H. Bays, Christian tracts: the Two Friends, see Suzanne W. Barnett and John K. Fairbank, Edited by, Christianity in China: Early Protestant missionary writings, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1985, p.21, p.23, p.183, notes 14.
- 7) 各版本情況請見黎子鵬：《〈天路歷程〉漢譯版本考察》，載《外語與翻譯》，2007年第1期，第30頁始。
- 8) The Seventy-fifth Annual Report of the Religious Tract Society (1874), p.268.
- 9) Please see: <http://www.sbuniv.edu/library/uarchive/bios/bios/eyoung.htm>
- 10) 李齊念主編：《廣州文史資料存稿選編》第7輯《文化教育》，北京：中國文史出版社，2008年，第70頁。
(中山大學中文系博士生；哈佛燕京學社訪問研究員)

本誌第105号の公開は4月1日を予定

傅兰雅“时新小说”征文获奖作品序文钞
(下)

刘 德 隆

七、第七名

书 名：达观道人閑游记 篇幅：上下卷十四回

作者姓名：未知 作者署名：格致散人

奖 金：八元

作 品：

封面： (第二册、P、四九九)

敬呈

钧 览 寄居雒水格致散人著

时新小说 达观道人閑游记上卷

序言 (第二册、P、五 一一五 三)

小引

粤自走马负图，史乘不矜小说；汗牛充栋，稗官特演章回。体格既殊，笔情亦异，书称才子、有鬼神莫测之机；语等齐东，侈狐鬼荒唐之说。下此者绘声绘色，或为名臣肖子，写其神，记事记言；或为思妇劳人，昭其隐，把卷而消长夏。摧尽睡魔，挑灯而玩深宵，弥增吟兴。然而耻廉仁义劝化者，每慨雷同；节义忠贞贞见者，谁殷月旦。欲救当时之弊，愧我无权；若求绝世之才，又将奚待？

适阅《申江日报》，几同博古群书。仰钦英国大儒，伤著时新小说，具感人之雅意，三事皆宜；爰搜我之枯肠，一篇勉就。危词深警惕，

嗟国俗之频仍；教化赖转移，惜民风之太弱。说尽寒儒潦倒，皆缘锦绣无凭；写来贫士凄凉，半是芙蓉有癖。鄙事未能尽草，当力劝以通其情；成规未必轻便，当积学以观其变。不必圣经贤传，见之而抚己怀惭；差同暮鼓晨钟，聆之而逢人称善。弊之深者言必悚，小足山非骇听闻；语之浅者意弥真，姚孝廉实成痰疾。惟冀情能遍喻，语言何惜万千；敢云力可挽回，划策亦微一二。借达观之游迹，粉饰何妨；偷诵习之余暇，描摹尽致。姑待哲人赏识，莫笑樗材；倘同佳话流传，盍遗梓氏。

光绪二十一年七月中浣寄居寄居雒水格致散人甫稿

八、第八名

书 名：时新小说 篇 幅：五卷十回

作者姓名：胡晋修 作者署名：胡晋修

奖 金：七元

作 品：

封面： (第三册、P、一)

青州府临淄教末胡晋修撰著

序言 (第三册、P、三一五)

尝见世间之颓风败俗有关乎国家之盛衰者，惟中国为最，意欲枚指其弊，即罄南山之竹亦不能书。心窃忧之，不知以何书行世，始可警醒中国之人也。或者曰：中国有四书五经、诸子百家在，俛可教人，何须忧？余曰：不然。中国之经书，虽皆圣贤格言明训，然非有学问者不能讲。即使能讲而中无新趣，听之者往往如嚼腊而欲睡，夫何能推行广速、感动人心，变易风俗哉！是以忧心孔急，择中国积弊最重大者，即鸦片、时文、缠足三者为正旨，而以祛各弊之法为陪衬，取近今恒有实有之事，易于振聋启聩者敷衍其中，合显此三事之大害妨碍者，易之伤时者去之，彙为一编，名之曰

“时新小说”使人阅之。词句浅明，意思趣雅，不但学士文人喜为看阅，即妇女幼子亦爱听闻。传之不久，辄能家喻户晓，则心为感动，力为革弊，庶几使气习一变，焕然一新耳。设也中国人果能不拘成迹，改弦易辙，发奋为雄，亦无不可共臻富强，措天下于磐石之安，是余所厚望也夫。是为序。

九、第九名

书名：无名小说 篇幅：十二回
作者姓名：刘忠毅 作者署名：刘忠毅
奖金：六元

作品：

封面： (第三册、P、一五三)

刘忠毅

序言 (第三册、P、一五五——五六)

自序

此书所载，乃方学士一生之事，一家之事。

然而时文之足以致贫，鸦片之足以为害与中国妇女之缠足，只能居家坐食，不能出外谋事，其为害一一俱见。一家如此、一国如此，可知中国国家亦宜知所变计矣。否则，中国必至民生日困，国计日穷，而中国将不亡而自亡，可不惧哉！

十、第九名

书名：时新小说 篇幅：四卷三十回
作者姓名：杨味西 作者署名：杨味西
奖金：六元

作品：

封面： (第三册、P、一九九)

时新小说卷一

序言 (第三册、P、二 一)

(无序)缠足图一幅

十一、第十名

书名：已佚 篇幅：不明
作者姓名：已佚 作者署名：张润源
奖金：五元
作品：已佚

十二、第十名

书名：已佚 篇幅：不明
作者姓名：已佚 作者署名：枚甘老人
奖金：五元
作品：已佚

十三、第十一名

书名：已佚 篇幅：不明
作者姓名：已佚 作者署名：殷履亨
奖金：四元
作品：已佚

十四、第十一名

书名：瓢盪新谈 篇幅：四卷二十八回
作者姓名：已佚 作者署名：赵地倜傥非常生
奖金：四元
作品：

封面：

无

序言 (第三册、P、四三七—四三八)

瓢盪新谈自序

花明红藕，酒泛碧筒，茶铛煎水，竹榻当风。当此长日如年，与二三知心，挥麈閒谈，畅所欲言，兴非浅也。迺韶光迅速，梧落叶兮月凉；秋信凄清，柳减腰兮风冷。寒生金井，暑退银塘，未免有情，乌能已已。仆频年作客，萍逐浪以飘流；小住惟佳，兰有馨而寄託。第才同襪线，见等醯鸡。扞蝨而谈，景略之风流未逮；击楫而渡，祖生之豪迈不如。惟性喜塗

鴉，情耽管兔，因消炎而纵笔，爰集语以成篇。事适等于乌有子虚、说不设于搜神论鬼。三百年之成法，将革为因；千万人之新妆，以大易小。荧荧灯火，削鬼籍以登仙；落落姓名，问前生之故我。矢罪言于盛世，人应对之胡卢；非志异于聊斋，君或其孤愤。

时旃蒙协洽七夕後十三日于琴川西城寓所
影娥池畔擷蘭仙馆燕赵偶儗非常生自志

十五、第十二名

书名：新趣小说 篇幅：八回
作者姓名：朱正初 作者署名：朱正初
奖金：三元
作品：
封面：（第四册、P、一）
信封（已残）
敬求 转致 朱正初拜干
扉页：（第四册、P、三）
新趣小说 朱正初
序言：
无

十六、第十二名

书名：醒世新书 幅：上下卷十二回
作者姓名：醒世人 作者署名：如皋醒世人
奖金：三元
作品：
封面：（第四册、P、八九）
呈
览

醒世新书 如皋醒世人
序言：（第四册、P、九一一九三）
醒世新书序

今夫举世一梦境也。人非贤知，孰能先觉？无怪碌碌庸众，终日昏混瞶瞶，尽颠倒是

睡梦中。然睡梦则有醒时，乃有似睡梦而实非睡梦，竟有终身而不能醒者。非不能醒也，以彼囿于风气，拘于习俗，坐使身心才力，尽用于无用之途，犹且诩诩然自以为得计。循此数端，则妍媸可以立辨，显荣可以骤致，疾病可以永除，而不知祸患频仍之接踵于後也。直至身心才力疲惫不堪，于是呼号哀怨，困顿无聊，始猛然省，豁然悟，幡然改，则是亡羊而补牢，见兔而顾犬矣。迟矣！晚矣！悔奚逮矣！然而若人则亦未有以醒之也。苟使有以醒之势，必举从前积习一扫而空。此则博士命题之美意，而适当鄙人之私悃焉。鄙人不忍以一己独醒而遂无以醒世人也。且深恐世人之不能遽醒而负命题一片之苦心也。因于冗务之隙，敷衍瀾言，计得若干回。以期世之昏混瞶瞶，尽颠倒于睡梦中者，相与共醒也已。

光绪二十一年相月中旬醒世人笔于独醒轩

十七、第十三名

书名：缠足明鉴 篇幅：一册（七回）
作者姓名：廖卓生 作者署名：粤东端州廖卓生
奖金：二元
作品：
封面：

（第四册、P、二八七）

信封

烦 台驾即代交上海三马路格致书室
傅蘭雅先生收入

南粤东羊城西牧师行

在伍仙西街廖托

序言：

无

本书後有《鴉片丛话》一篇。

本书後有《时文丛话提纲》一篇。後署

“光绪乙未七月三十日端州廖卓生跋于羊城珠光里东约之培正书院”。

闹春秋。秦汉兴亡过手。青史几行姓名，北郊无数荒塚，前人田地後人收。说甚龙争虎斗。

四

十八、第十三名

2011年7月31日与浣纱六村

书名：醒世时新小说石琇全传

篇幅：上下卷九回

作者姓名：罗懋兴 作者署名：罗懋兴

奖金：二元

作品：

封面：（第五册、P、一）

醒世时新小说

广东新安李萌传道书院罗懋兴订

序言：

无

十九、第十四名

书名：甫里消夏记 篇幅：十六回

作者姓名：瘦梅词人 作者署名：甫里瘦梅词人

奖金：一元半

作品：

封面：

无

序言：

无

二十、第十四名

书名：新趣小说 篇幅：四卷二十回

作者姓名：陈义珍 作者署名：陈义珍

奖金：一元半

作品：

封面：（第五册、P、三三三）

冯文姬（人像一副・一女子携一幼童）

序言：（第五册、P、三三五）

西江月

道德三皇五帝，功名夏后商周，英雄五霸

清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します

李 艶麗 仮名垣魯文と林紘の比較文学史

近代初期の文人意識における伝統と

近代の相克 『思想史研究』第5号

日本思想史・思想論研究会2005.10.31

近代初期上海における小説雑誌の

「世俗化」 晩清四大小説雑誌を

中心に 『思想史研究』第6号2006.

5.15

二つの『世界末日記』 清末の科学小説と世紀末思潮 『思想史研究』

第7号2007.3.1

「情」「徳」之間の浮沈 作爲晩

清寫情小説者の吳趸人的肖像 『ア

ジア地域文化研究』第4号 2007年度

東京大学大学院総合文化研究科・教養

学部アジア地域文化研究会2008.3.31

「徳」と「情」の間での浮沈 写

情小説者としての林紘の肖像 『思

想史研究』第9号2008.9.20

「美男」の誘惑 清末写情小説の

「文弱」な男性像についての解説

『アジア地域文化研究』第6号2010.3.31

「日本」の可能性 冷血作品を解説

する試み 『年報地域文化研究』第

13号2009年東京大学大学院総合文化

研究科地域文化研究専攻 2010.3.31

「女中華」の構築 清末写情小説，

- 新女性小説をめぐって 『アジア地域文化研究』第7号2011.3.31
- 永田小絵 中国翻訳史における小説翻訳と近代翻訳者の誕生 前編 『翻訳研究への招待』第1号 2007.1電字版
同上 後編 『翻訳研究への招待』第2号 2008.2電字版
- 森岡優紀 明治雑誌記事と魯迅の「スパルタの魂」 森時彦編 『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所2009.6電字版
- 有澤晶子 外国語ができない林紵による超絶翻訳と嚴復による翻訳論 「第5章翻訳論」 『比較文学 比較を生きた時代 日本・中国』研文出版2011.7.11
- 池田智恵 1920年代における探偵小説創作の黎明 近代中国と日本の「雑誌空間」を通じて 関西大学 『東アジア文化交渉研究』第4号2011.3.31 電字版
「犯罪」を消費する読者と『時事新報』 「黒幕」欄 中国近代探偵小説研究への視座として 『野草』第88号 中国文芸研究会2011.8.1
- 土屋英明 『擘海花』 中国の性愛文獻 第175 『東方』2011年11月号 2011.11.5
- 張 俊才 林紵的西学観 『福建工程学院学报』第8巻第5期(総第45期) 2010.10.10
- 林 佩璇 従話語修辞角度観林紵翻訳帰化現象 以林紵《黒奴籲天録》中訳本為例 『福建工程学院学报』第8巻第5期(総第45期) 2010.10.10
- 章 艶 『在規範と偏離之間 清末民初小説翻訳規範研究』 北京・外語教学与研究社2011.3 同濟外語學術論叢
- 顔 瑞芳 《清代伊索寓言漢訳三種》導論 顔瑞芳編著 『清代伊索寓言漢訳三種』台湾・五南圖書出版股份有限公司2011.3
- 吳 礼權 『清末民初筆記小説史』台湾商務印書館2011.8
- 張 麗華 『現代中国『短篇小説』の興起 以文類形構為視角』北京大学出版社2011.4
- 楊 麗華 『中国近代翻訳家研究』天津大学出版社2011.4
『中国現代文学研究叢刊』2011年第3期(総第140期) 2011.3.15
給新文学史重新断代的理由 關於“民国文学”構想及其它的幾点補充意見 ……丁 帆
『中国現代文学研究叢刊』2011年第4期(総第141期) 2011.4.15
戯曲改良：媒体策略与啓蒙困境 ……楊 早
黃人《中国文学史》与《京師大学堂章程》、《高等学堂章程》之關係發微 ……温慶新
『中国現代文学研究叢刊』2011年第5期(総第142期) 2011.5.15
革新《小説月報》的前後 1920年代初文壇的“旧”与“新” ……柯希璐
『翻訳史研究』第1輯(2011)
上海・復旦大学出版社2011.6
- 哈葛德少男文学(boy literature)与林紵少年文学(juvenile literature)：殖民主義与晚清中国国族觀念的建立 ……関詩珮
清末女性空間開拓：薛紹徽編訳《外国列女伝》の動機与目的 ……錢南秀
家与国的抉択：晚清Robinson Crusoe諸訳本中的論理困境 ……崔文東
『明清小説研究』2011年第2期(総第100期)
2011発行月日不記
《説倭伝》平議 ……王永健
《国聞報》所刊《本館附印説部縁起》之作者考辨 ……皮後鋒、楊琥
“自由文筆”下的“自由翻訳” 包天笑翻譯小説研究 ……沈慶会、孔祥立